

研修会のお知らせ
15ページ参照

平成12年6月8日 第三種郵便物認可（毎月1日発行） 平成26年6月1日発行

2014.6
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみやく 富薬

6号

第36巻
No.299



ジョウザン *Dichroa febrifuga* Lour. (ユキノシタ科 *Saxifragaceae*)

生薬

ジョウザン（常山） 秋に掘り取り、茎部やひげ根を取り除いて水洗し、陽乾する。

成分

アルカロイド： α - β - γ -dichroine, dichroidine, febrifugine, iso febrifugine 等。

効能

古来、悪寒と発熱の発作を繰り返す瘧疾の治療薬として使われる。抗マラリア、解熱、吐痰薬として常山飲、知母鼈甲湯、七宝飲などに配合される。



生薬 ジョウザン

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇

日本ではあまり馴染みのない植物で、中国では揚子江以南、台湾やスマトラ、ボルネオ、ジャワ島など亜熱帯から熱帯の林床に生える落葉低木で、日本では露地での栽培が比較的困難な植物ですが、最近ではアジサイに似た青紫色の花が美しいことから園芸植物として稀に栽培されることがあります。また、薬効が日本ではあまり発症しないマラリアの薬であったことも知られない原因になっていると思われます。

中国では『神農本草経』の下品に収載され、古くから用いられた薬です。「恆山。一名互草。味苦寒。生川谷。治傷寒寒熱。熱發温瘧。鬼毒。胸中痰結。吐逆」とあり、古来より瘧疾の治療薬として常用されていた生薬です。しかし李時珍(1518~93)が「恆はやはり常である」とし、「恆山といふは北岳の名称で今の定州にある。常山といふは郡名で、やはり今の眞定の土地だ。これはこの薬が始めて此等の土地に産したものでこの名称が生じたといふわけでもあらうか」と言っています。北岳、眞定は共に河北省の地名であることから、ジョウザンの自生はなく、似た薬効を持つ他の植物を示していると考えられます。『新修本草』(659)に「三月に青萼の白花を開き、五月実を結ぶ、実は青く円く、三子が房になる」とあることから古来の原植物は4~5月に花が咲き、夏には2~3の分果が実るミカン科のククサギ(*Orixa japonica* 臭常山)ではないかと推測されています。

しかし、同じ頃の『本草経集注』(502~536)には「常山は、宜都、建平産の細かにして実して黄なる者が鶏骨常山と呼びこれを用ゐるが尤も優れてゐる」と記され、四川産で質が堅く、重く、淡黄色の木質部を持つ様子が鶏の骨のようであるところから名付けられた現在の鶏骨常山と同じ表現がなされていることから、こちらはジョウザン由来の生薬を示しているものと思われます。

このように、昔から原植物が混乱しているように、中国には様々な常山があり、使用方もそれぞれ異なっています。アカネ科のコンロンカ(*Mussaenda parviflora*)や*M. Divaricata*の根を「白常山」、クマツヅラ科のクサギ(*Clerodendron trichotomum*)の根を「海州常山」、ユキノシタ科のヒマラヤタマアジサイ(*Hydrangea aspera*)や*H. Strigosa*の根を「土常山」、その他アジサイ属のアマチャ(*H. thunbergii*)やハイノキ科のタイワンサワフタギ(*Symplocos chinensis*)、クマツヅラ科のニンジンボク(*Vitex cannabifolia*)の根も「土常山」と呼ばれています。「山常山」はメギ科のメギ属の根のことを言います。

日本においては植物としてのジョウザンが渡来していなかったことで、『大和本草』(1709)には「二種あり、一種ククサギという木也、臭梧桐と云う、其葉くさし」とあるところからクサギであり、「一種ククサギと云物あり、小樹其葉茶のこたくにして臭し」、続いて『新修本草』の表現を引用しています。『本草綱目啓蒙』(1803)においてもククサギと思われる植物の特徴を挙げ、「是茗葉の常山にして眞物なり、薬家に舶来の常山あり、同物にして即鶏骨常山なり」と述べています。更に「今はクサギの小木の根を黄色に染乾して常山となしうる者は非なり、又ヤマアジサイの根を黄色に染て偽り売るものあり、只ククサギの根を眞とすべし」と言っています。

(村上守一 記)